

教育・研究等業績一覧

| 履 歴 | | | | | |
|-------------------|---|----|-------|----|------|
| フリガナ | フジタ マモル | 性別 | 生年 | | |
| 氏名 | 藤田 守 | 男 | 1972年 | | |
| 所属 | 農学ビジネス学科 | 身分 | 准教授 | | |
| 学 歴 | | | | | |
| 年 月 | 事 項 | | | | |
| 1994年8月 | Institute of Languages, The University of New South Wales, Sydney, Australia (～1995年4月) | | | | |
| 1996年3月 | 拓殖大学 政経学部 経済学科 卒業 経済学士 | | | | |
| 1998年3月 | 国立台湾師範大学国語教学中心 (～1999年6月) | | | | |
| 1999年9月 | 東呉大学 (台湾) 外国語文學院 修士課程 入学 | | | | |
| 2001年8月 | 東呉大学 (台湾) 外国語文學院 修士課程 修了 | | | | |
| 2002年1月 | 東呉大学 (台湾) 文学修士 (言語学) | | | | |
| | | | | | |
| 職 歴 | | | | | |
| 年 月 | 事 項 | | | | |
| 1996年4月 | ビッグホリデー株式会社 (東京都, 旅行業) 入社 営業企画室, 宣伝広報担当 (～1997年3月) | | | | |
| 1997年4月 | 同社総務部付, コミュニティ・ネットワーク株式会社 (東京都, チケット販売業及び旅行業) 出向, システム事業部, コンピューター端末保守担当 (～1998年1月) | | | | |
| 1998年6月 | 福爾摩沙地球村語文短期補習班 (台湾) 専任講師 (～2000年6月) | | | | |
| 1999年6月 | 協易機械股份有限公司 (台湾) 非常勤講師 (～2002年3月) | | | | |
| 1999年12月 | 台湾松下電器股份有限公司 (台湾) 非常勤講師 (2000年1月) | | | | |
| 2000年3月 | 東呉大学 (台湾) 公開講座 非常勤講師 (～2004年2月) | | | | |
| 2002年10月 | 財団法人資訊工業策進会 (台湾) 非常勤講師 (2003年11月) | | | | |
| 2003年9月 | 国立中正紀念堂 公開講座 非常勤講師 (～2003年1月) | | | | |
| 2003年9月 | 世新大学 (台湾) 人文社会学院 日本語文科学科 非常勤講師 (～2004年1月) | | | | |
| 2004年4月 | 拓殖大学北海道短期大学 経営経済科 専任講師 (～2007年3月) | | | | |
| 2007年4月 | 拓殖大学北海道短期大学 経営経済科 助教 (職位名改称) (～2009年3月) | | | | |
| 2009年4月 | 拓殖大学北海道短期大学 経営経済科 准教授 (～2014年3月) | | | | |
| 2014年4月 | 拓殖大学北海道短期大学 農学ビジネス学科 (学科改組) 准教授 現在に至る | | | | |
| | | | | | |
| 教 育 業 績 | | | | | |
| 1 担当授業科目 (2017年度) | | | | | |
| 科 目 名 | 出講場所 | 期別 | 曜日 | 時限 | 備 考 |
| キャリアスキル | 演習室3 | 前期 | 月 | 2 | |
| 2年ゼミナール | 演習室3 | 前期 | 木 | 3 | |
| 1年ゼミナール | 演習室3 | 前期 | 木 | 4 | |
| 総合中国語Ⅰ | 205教室 | 前期 | 月 | 5 | Bクラス |
| 総合中国語Ⅲ | 205教室 | 前期 | 月 | 4 | Bクラス |
| 中国語コミュニケーションⅠ | 205教室 | 前期 | 火 | 4 | Aクラス |
| 中国語コミュニケーションⅢ | 205教室 | 前期 | 火 | 3 | Aクラス |
| 日本語コミュニケーションⅠ | 205教室 | 前期 | 水 | 2 | Aクラス |
| 日本語コミュニケーションⅠ | 205教室 | 前期 | 火 | 2 | Bクラス |
| 総合日本語Ⅲ | ラボ室 | 前期 | 水 | 1 | |
| 日本語コミュニケーションⅢ | 303教室 | 前期 | 火 | 1 | |
| 地域プロジェクト | 演習室3 | 前期 | 木 | 5 | |
| 地域特別演習 | 演習室3 | 前期 | 木 | 5 | |
| 卒論演習 | | | | | (随時) |
| | | | | | |
| キャリアスキル | 302教室 | 後期 | 月 | 1 | |
| 2年ゼミナール | 演習室3 | 後期 | 木 | 3 | |
| 1年ゼミナール | 演習室3 | 後期 | 木 | 4 | |
| 総合中国語Ⅱ | 205教室 | 後期 | 月 | 3 | Bクラス |
| 総合中国語Ⅳ | 205教室 | 後期 | 月 | 4 | Bクラス |
| 中国語コミュニケーションⅡ | 205教室 | 後期 | 火 | 4 | Aクラス |
| 中国語コミュニケーションⅣ | 205教室 | 後期 | 火 | 2 | Aクラス |

| | | | | | |
|--|--|----|---|---|-------|
| 日本語コミュニケーションⅡ | 205 教室 | 後期 | 火 | 3 | A クラス |
| 日本語コミュニケーションⅡ | ラボ室 | 後期 | 水 | 1 | B クラス |
| 総合日本語Ⅳ | ラボ室 | 後期 | 木 | 1 | |
| 日本語コミュニケーションⅣ | ラボ室 | 後期 | 水 | 2 | |
| 地域プロジェクト | 演習室 3 | 後期 | 木 | 5 | |
| 地域特別演習 | 演習室 3 | 後期 | 木 | 5 | |
| 卒論演習 | | | | | (随時) |
| 2 現行授業の目標と教育効果及びそれに対する自己評価 (記述式：900 字以内) | <p>(1) 現行授業の目標 (以下、平成 29 年度授業改善のための学生アンケート集計結果より) 中華文化や日中関係の理解、語学力向上を目標とした。こうした活動を通じて授業の活性化と学習効果の向上を目標とし、従来の取り組みの中で以下 5 点をさらに強化した。</p> <p>①第 2 外国語学習は難しそうというイメージの払拭と語学学習継続後のイメージの醸成 ②メディア報道による情報と一般市民意識の例を提示し、双方の相違点の明確化 ③語学学習や文化に関する情報提供を通じての教養レベルのさらなる高揚 ④学習目的に応じた情報の提供による学習成果の自覚 ⑤語学学習得やその必要性に懐疑的な学習者のアプローチ方法を取り入れた授業運営</p> <p>(2) 教育効果 2-1. 受講生による評価 I-1, 評価 3.7 II-1, 評価 4.0 II-2, 評価 3.0 II-3, 評価 3.8 II-4, 評価 3.1 II-5, 評価 4.0 II-6, 評価 3.7 II-7, 評価 3.8 II-8, 評価 3.5 III-1, 評価 3.9 III-2, 評価 3.6 III-3, 評価 3.9 自由記述 (原文のまま) 1. わかりやすいように説明しながら教えている所がよかった。2. 生徒に合わせて授業が進んでいる。3. 教科書に沿って細かく教えてもらったことです。4. 暗記力が高まった。5. 難易度が丁度良い。6. テレビでビデオとか見れたりして中国の文化を知ることができてより中国への理解が深まった。7. 話がわかりやすい。</p> <p>2-2. 取り組みの結果 ① I-1 (評価 3.7), II-2 (評価 3.0) や自由記述 1, 2, 5, 7 により、おおむね達成された。 ② III-2 (評価 3.6) と自由記述 6 に若干の差異はあるが、おおむね達成された。 ③ III-1 (評価 3.9), III-3 (評価 3.9) 自由記述 6 によりおおむね達成された。 ④自由記述 4 により、理解が得られたものと判断する。 ⑤ II-5 (評価 4.0) II-6 (評価 3.7) II-7 (評価 3.8) や自由記述からおおむね達成された。</p> <p>(3) 自己評価 学習難易度が高まり、学習動機の維持が課題となる中、我々が普段送る生活と学習内容のかかわりを意識させることは、語学学習目的の明確化や学習意識の高揚のみならず広く教養レベルを向上させることにつながると考えている。 こうした点が、学習者に受け入れられたことがアンケート結果等に反映されており、最終的に無事学習を修了することができた点を考慮すると教員学生双方にとって有意義な授業時間を過ごすことができたものと再認識する結果となった。 今回の結果は、中国語科目を履修する学習者のうち編入希望者ほぼ全員が必修という位置づけで、なおかつ第 2 外国語の選択もできないという低い期待値にもとで一から学習を開始した学習者の評価である点を考慮すると、概ねすべての学生が十分に履修成果を確保できたものと考えている。</p> | | | | |
| 3 学生による授業評価も踏まえ、教育改善への取り組み (記述式：900 字以内) | <p>改善に向けた今後の取り組み方針は、授業の難易度が上がる中で、なお、学習目標を明確にして取り組む学習者が増えてきていることから、次年度は卒業後も継続的に中国や台湾、中国語に対する興味関心を維持継続させられるような情報の提供や自学自習方法など具体的な学習ストラテジーを提供することである。</p> | | | | |
| 4 教科書、教材の作成状況 (記述式：300 字以内) | <p>1. 教科書本文・単語関連の絵教材 (対象科目：総合中国語 I II III IV・中国語コミュニケーション I II III IV) 2. Blackboard を活用した全文ディクテーション課題 (対象科目：日本語コミュニケーション I II III IV)</p> | | | | |
| 5 学生の指導 (課外活動・厚生補導等) (主要 10 件以内) | <p>2004 年度 中国語検定準 4 級, 4 級 個別対策講座 2005 年度～現在に至る 中国語検定試験 (6 月・11 月) 学内試験運営管理 2006 年度～2007 年度 シーズンスポーツ同好会顧問 2009 年 8 月 処分学生に対する指導 (全 16 回) 2010 年 11 月, 2011 年 10 月 国際交流パーティー (深川国際交流協会) 対象留学生スピーチ指導 2010 年 12 月, 2011 年 11 月, 2013 年 11 月, 2015 年 10 月, 2016 年 10 月 国際交流パーティー (深川国際交流協会) 引率 2012 年 6 月～ (毎年 6 月) インターナショナルデー (深川国際交流協会) 発表指導及び引率 2013 年 7 月～ (毎年 7 月) しゃんしゃん傘踊り実行委員会指導 (学生委員会, 学生・地域国際交流委員会) 2013 年 11-12 月 経営経済科卒業制作実行委員会・委員 2016 年 1-2 月 海外研修上海研修者事前研修指導 (対象者 3 名, 全 3 回) 2016 年 10 月 海外研修参加者対象事後研修指導</p> | | | | |

| | | |
|---------------------|------------------------|---|
| 6 その他 (主要 5 件以内) | 2015 年 9 月, 2016 年 5 月 | 市民公開中国語講座 (全 7 回) (主催: 本学地域国際交流委員会) |
| | 2017 年 9 月-10 月 | 地域プロジェクト「多文化共生力を身に付けるための異文化交流」における市民参加者への対応 |

研 究 業 績

| | |
|-----------------------------|---|
| 1 研究分野・活動 (記述式: 350 字以内) | 超分節的特徴は会話によるコミュニケーションを行う上で重要な役割を果たす要因である。音声による明確な意味分別には超分節的特徴を適切に制御することで、自然なコミュニケーションや意思伝達が可能となる。その一方、中国語も日本語も音節、モーラの長さによる意味の分別があるにも関わらず、持続時間の制御規則に関する研究は十分とはいえない。目下の研究課題は中国語、日本語の発話における自然性の向上を目指し、中国語音声の持続時間と日本語のそれを、母語話者と学習者の発話データを対比させ総合的に検討することである。 |
|-----------------------------|---|

| | |
|--|--|
| 2 研究課題 (今後の展開・可能性を含む) (記述式: 350 字以内) | 研究課題「中国語話者の発話における中国語音節と日本語モーラの持続時間の特徴 - 学習者の母語の音声的特徴に基づく日本語発話リズム改善に関する一考察 -」 本研究では、日本語の CV 構造の短音の長さについて、日本語と中国語の発話実験の結果に基づき、日本語発話のリズム改善の糸口となりうる方向性を 2017 年 10 月 7 日に実施された第 14 回 マレーシア日本語教育国際研究発表会において提示した。 具体策として、中国語の軽声音節「个」の持続時間に注目し、日本語の/CV/構造の短音に中国語の軽声音節の特徴を適応させることにより、従来の日本語音声教育の学習効果をさらに高めることが可能となるものとする。今後も引き続き、発話単位を上げ被験者も増やして検討し結果を公表していく。 |
|--|--|

| | |
|-----------------------|--|
| 3 研究助成等 (主要 5 件程度) | (1) 文部科学省科学研究費 特になし |
| | (2) 学内 2010 年度 拓殖大学人文科学研究所個人研究助成 2016 年度 拓殖大学言語文化研究所個人研究助成 |
| | (3) 学外 特になし |

| | |
|------------------------|--|
| 4 資格・特許等 (主要 3 件以内) | |
|------------------------|--|

| 著書, 学術論文, 作品等の名称 (主要 15 件以内) | 単著, 共著 の別 | 発行又は発表 の年月 | 発行又は発表 雑誌等又は発表 学会等の名称 | 要 約 |
|--|--------------|---------------|---|--|
| (学位論文) 中国語母語話者の日本語発話におけるモーラ持続時間の特性 - 台湾出身者と東京語話者の発話データを比較対照して - | 単 | 2002 年 1 月 | 東呉大学修士論文. 200 頁 | 第二言語学習者が、目標言語話者と誤解のない円滑なコミュニケーションを行うには、その根底にある自然な言語のリズムによる発話は欠かせない。日本語のリズムではその基本単位とされるモーラの構成要素に、持続時間がしばしば挙げられているが、中国語母語話者の日本語発話に関するリズム研究のみならず音声的傾向に関する研究すら現状ではあまりなされていないので、発話の実態は不明な点が多い。従って、まず、中国語母語話者の日本語発話における時間的傾向の体系化とその問題点の指摘を本研究の目的とした。 |
| (学術論文) 北海道短期大学における日本語教育 | 単 | 2013 年 2 月 | 日本語教育の歩み－ 拓殖大学日本語教育 五十周年記念誌－ pp. 118-125 | 拓殖大学北海道短期大学の留学生の受け入れの経緯と教育活動・客員講師の招聘・課外活動の取り組みなどをまとめた上で、今後の課題について論じた。 |

| | | | | |
|--|---|-------------|--|--|
| <p>入学準備教育における学術的学習サイクルの適用 - e-learning システムによる日本語学習の意識調査とその結果 -</p> | 共 | 2011年10月 | <p>拓殖大学人文科学研究 所 紀 要 第 26 号 pp38-70</p> | <p>本研究の目的は遠隔地の留学生を対象に学習内容を日本語聴解に限定してe-learningシステムによる入学準備教育を実施し、その教育方法や学術的学習サイクルの適用の有効性を確認することである。本稿においては、教材利用回数など実施状況のデータ、アンケートによる意識調査や年度別の日本語能力試験合格率をもとに検討した。 その結果、学習前から学習後にかけて「日本語を聞く」ことに対する意欲は維持され自信は肯定的に変化し、本教育に対する達成感や満足感を得ていることが確認された。更に、日本語能力試験合格率は本教育を受けたグループの方が受けなかった過去のグループより高いという傾向が示された。</p> |
| <p>Effects and Evaluation of a Pre-School Education Program Using an E-learning System</p> | 共 | August,2011 | <p>International Journal of Computer Science and Information Security, Vol.9, No.8 pp.32-38.</p> | <p>At universities, new students' scholastic achievements have become more varied because of the university's increased entrance ratio. Each university must now work to improve new students' scholastic achievements. This study aims to develop a system to ensure new students' scholastic achievements. We implemented the pre-school education program using an e-learning system in the three months before entering a university and investigated the program's effects. The targets include the participating and non-participating new students. The investigation data are students' attendance and question responses after entering college. Results of attendance and question response data showed that participating new students maintained study habits after entering school.</p> |
| <p>拓殖大学北海道短期大学におけるe-learning システムを活用した入学準備教育 - 入学準備教育の実施と今後の課題 -</p> | 共 | 2011年3月 | <p>拓殖大学人文科学研究 所 紀 要 第 25 号 pp75-96.</p> | <p>拓殖大学北海道短期大学では、2003年度のAO入試の開始と同時に入学準備教育を導入した。また、経営経済科では2010年1月から2010年3月までの3ヶ月間、学習習慣の維持には、学習管理と双方向性が必要であると考え、e-learning システムを活用して実施した。実施結果より、現在大学が置かれている環境から、入学準備教育の必要性を確認した。第2章では、拓殖大学北海道短期大学経営経済科において2009年度にe-learning システムを活用して実施した入学準備教育の概要と学習状況について述べた。続く第3章では受講後に受講生を対象に行った入学準備教育の評価に関するアンケート調査の結果を述べ、第4章では実施結果に関して考察した。第5章では今後の課題と改善方法を検討した。</p> |
| <p>中国語母語話者の日本語発話における助詞の軽声化とその原因 - 2 モーラ語の単語発話と文節発話の比較 -</p> | 単 | 2008年10月 | <p>拓殖大学語学研究 118号 pp.13-30</p> | <p>本稿により明らかとなった点は以下のとおりである。中国語の文法上の付属語である「助詞」はすべて軽声で発話され、長さが短い。日本語の助詞には長さの特徴はない。中国語母語話者は日本語の付属語に当たる助詞をも中国語の付属語と同じと考えている可能性がある。 尾高型は単語発話ではアクセント核はないが、文節発話では尾高型発話はアクセント核が生じるため混乱しがちであり、助詞のモーラには母語で使い慣れている中国語の軽声が使われたと考えられる。 以上から、学習者が母語である中国語の「第四声+軽声」というアクセントで日本語の「単語の語末+助詞」を読み上げている傾向が示唆された。</p> |

| | | | | |
|---|----------|-------------------|--------------------------------|--|
| <p>中国語母語話者の日本語文節発話のモーラ持続時間 - 1 モーラ語から 4 モーラ語の語末と助詞の長さの特徴 -</p> | <p>単</p> | <p>2007年9月</p> | <p>東呉外語学報第25期 pp.81-114</p> | <p>中国語母語話者の文節発話は助詞の前の語末モーラの持続時間が長音化すると仮説をたて中国語母語話者の上級者と初級者、東京語話者の発話実験を行った。 その結果、東京語話者は平板式と起伏式アクセントで語末と助詞は「短・長」傾向であった。平板式アクセント発話では中国語母語話者の初級者・上級者ともに東京語話者と同様であった。起伏式アクセント発話では中国語母語話者の上級者は東京語話者と同様だが、初級者は「長・短」であった。</p> |
| <p>中国語母語話者の語末長音化現象 - 単語発話における日本語モーラ持続時間の特徴 -</p> | <p>単</p> | <p>2005年9月</p> | <p>東呉外語学報第21期 pp.41-71</p> | <p>語末伸長化現象 (final lengthening) とは、韻律境界前でセグメントが伸長される現象である。中国語ではポーズ前の音節母音の持続時間が伸長する。 本研究では、日本語にもある語末伸長化現象が、中国語話者の日本語発話でもあるのか明らかにすることを目的とし、中間言語研究の観点から、中国語話者(上級者・初級者)と東京語話者の発話を調査した。</p> |
| <p>中国語母語話者の日本語モーラリズム - モーラ数とモーラ持続時間の相関関係 -</p> | <p>単</p> | <p>2003年7月</p> | <p>東呉日語教育学報第26期 pp.243-274</p> | <p>本稿は中国語母語話者と東京語話者の日本語発話におけるモーラリズムがどのように現れるかを検証したものである。 東京語話者 5名と台湾出身の中国語母語話者 11名(上級者群 6名・初級者群 5名)の1-4モーラの無意味語を用い東京アクセント型による発話の録音とその持続時間の測定をした。モーラ数と持続時間の相関関係を表す線の直線性・語全体における各モーラの平均持続時間の算出を行い、三者を比較した。</p> |
| <p>中国語母語話者の日本語発話におけるモーラ持続時間に関する初歩的研究 - 発音調査報告 -</p> | <p>単</p> | <p>2002年7月</p> | <p>東呉日語教育学報第25期 pp.85-118</p> | <p>誤解のない円滑なコミュニケーションを行うには、自然な言語のリズムが欠かせない。 中国語母語話者の日本語発話における時間的傾向の把握を本稿の目的とし、東京語話者 5名と台湾出身の中国語母語話者 11名(上級者群 6名・初級者群 5名)の1-4モーラの無意味語を用い東京アクセント型による発話の録音とその持続時間の測定をした。そして、発話データに関するモーラの持続時間・全体に占める各モーラの持続時間の割合・持続時間のばらつきの算出を行い、三者を比較した。</p> |
| <p>(学会等発表)</p> | | | | |
| <p>中国語話者の発話における中国語音節と日本語モーラの持続時間の特徴 - 学習者の母語の音声的特徴に基づく日本語発話リズム改善に関する一考察 -</p> | <p>単</p> | <p>2017年10月7日</p> | <p>第14回 マレーシア日本語教育国際研究発表会</p> | <p>本研究では、日本語の/CV/構造の短音の長さについて、日本語と中国語の発話実験の結果に基づき、日本語発話のリズム改善の糸口となりうる方向性を提示した。 日本人1名には日本語発話、中国人1名には日本語と軽声音節を含む中国語の発話を求め、得られたデータを検討の対象とした。 その結果、中国人は日本語の発話に中国語の長さを用いる傾向を確認した。 具体策として、中国人の中国語の軽声音節「个」の持続時間に注目し、日本語の/CV/構造の短音に中国語の軽声音節の特徴を適応させることにより、従来の日本語音声教育の学習効果をさらに高めることが可能となるものとする。今後は、発話単位を上げ被験者も増やして検討していく。</p> |

| | | | | |
|--|---|------------|--|--|
| 多様な日本語レベルのクラスにおける e-learning システムを活用した長期休暇中の聴解学習—全文ディクテーション課題の取り組み結果とその評価— | 単 | 2016年9月10日 | 2016年日本語教育国際研究大会研究論文発表 | 本研究は、多様な日本語レベルの留学生8名を対象に休暇中の Blackboard による学習状況と学習効果、取り組みのアンケート結果を報告した。 一連の学習プロセスの結果に基づき、取り組み回数や複数回の学習の割合と学習効果に関しては杉浦他(2002)、アンケート結果から、全文ディクテーション取り組みの評価は元田(2014)、Blackboard による学習の評価は藤田他(2011)と、概ね同様の肯定的な評価傾向が確認された。 これらに加え、本研究では Blackboard は休暇中の学習管理をある程度可能にすること、各群の取り組みの特徴が日本語レベルの測定手段としての可能性がある点にも言及した。 |
| マルチメディア・コンテンツを活用した入学準備教育における出題方法の改善と情報教育科目の評価 | 共 | 2011年9月8日 | 平成23年度教育改革 ICT 戦略大会予稿集 社団法人私立大学情報教育協会 | 課題の解説にマルチメディア・コンテンツを活用して出題方法を改善し、入学準備教育を実施した。その結果、入学前では改善前よりも改善後の受講生が学習習慣を維持し、各章での受講生の取り組みは問題の趣旨を理解した解答に改善された。 |
| 日本語聴解力養成のための e-learning システムによる入学準備教育 - 中国在住の中国人留学生を対象に - | 共 | 2011年8月21日 | 跨文化交际中的日语教育研究 2, pp. 295-297, 修刚, 李运博(編) 高等教育出版社(中国) | 日本語の聴解力不足は拓殖大学北海道短期大学の留学生にも散見されるため、学習習慣の確立と聴解能力の向上を目的とする入学準備教育を2010年より留学開始3カ月前の留学生を対象に実施している。 2011年における本教育実施後のアンケート結果によると、「聞く」「話す」共に自信に対する評価が向上して改善傾向が認められた。また、自由記述による評価も概ね肯定的であり、本教育の修了時には学習習慣の形成がなされていたと考える。 さらに、入学後に実施した試験結果によると、本教育の取り組みの程度と入学後の聴解力の向上の程度は一定の関係があり、入学後の取り組みにも影響を与えていることが確認された。 |
| 短期大学におけるマルチメディア・コンテンツを活用した e-learning システムによる入学準備教育の教育効果 | 共 | 2011年5月3日 | 日本教育工学会研究報告集 JSET11-2 | マルチメディア・コンテンツを活用した e-learning システムによる入学準備教育を、短期大学の社会科学系学科で実施した。 その結果、マルチメディア・コンテンツを活用して教材や課題の出題方法を工夫したことにより、受講生の学習への取り組み方が改善された。また、入学準備教育の受講生が入学後に受講する情報教育科目で学習習慣を維持する教育効果を確認した。 |
| 入学準備教育に活用できるコンテンツ自動作成システムの評価 | 共 | 2010年9月3日 | 平成22年度教育改革 ICT 戦略大会予稿集 pp.216-218 社団法人私立大学情報教育協会 | 学生生活の理解や基礎学力の向上のため、短期大学では入学予定者に対する入学準備教育の実施を求められている。この要求に対して、2010年1月から3月の3ヶ月間、e-learning システムを活用し、社会科学系短期大学の日本人学生と留学生の入学予定者を対象とした入学準備教育を実施した。本研究では、この学習状況と実施結果を報告した。 |
| 短期大学の入学者を対象とした入学準備教育における e-learning システムの活用 | 共 | 2010年7月3日 | 日本教育工学会研究報告集 JSET10-3 pp.71-78 | 入学準備教育のための e-learning 教材として、マルチメディア・コンテンツを開発した。語彙力、文章の読み方、講義ノートの取り方と留学生向け日本語会話能力の四つを準備した。受講者から高い評価が得られたものの、出題方法の改善など課題も明らかになった。 |
| (その他) | | | | |
| 多様な日本語レベルのクラスにおける e-learning システムを活用した長期休暇中の聴解学習—全文ディクテーション課題の取り組み結果とその評価— | 単 | 2018年3月 | 拓殖大学語学研究 138号 | 本稿は日本語教育国際研究大会において、2016年9月10日に行われた研究論文発表に基づく抄録である。 |

| | | | | | |
|---|-------------------|---------------------------------|---|--|----------|
| Effects and Evaluation of a Pre-School Education Program Using an E-learning System (summary) | 共 | October,2011 | The Journal of Humanities and Sciences, No.26 Institute for Research in the Humanities, Takushoku University | This report on our research results to date was made possible by a grant-in-aid for individual research, in fiscal year 2010, from the Institute for Research in the Humanities at Takushoku University. It was published in "Effects and Evaluation of a Pre-School Education Program Using an E-learning System" in the International Journal of Computer Science and Information Security (2011; Vol. 9, No. 8, pp. 32-38). | |
| 初対面の人との話題 | 単 | 2008年12月 | 日本語ジャーナル 12月号 pp.37-42 | 『階梯日本語雑誌』通巻第259号、鴻儒堂出版社 | |
| 会話の円滑な終わらせ方 | 単 | 2008年11月 | 日本語ジャーナル 11月号 pp.37-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第258号、鴻儒堂出版社 | |
| オフィスに氾濫する二重敬語 | 単 | 2008年10月 | 日本語ジャーナル 10月号 pp.37-42 | 『階梯日本語雑誌』通巻第257号、鴻儒堂出版社 | |
| 一般社員の朝礼の挨拶 | 単 | 2008年9月 | 日本語ジャーナル 9月号 pp.37-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第256号、鴻儒堂出版社 | |
| 管理職の朝礼の挨拶 | 単 | 2008年8月 | 日本語ジャーナル 8月号 pp.38-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第255号、鴻儒堂出版社 | |
| わかりやすい説明の仕方 | 単 | 2008年7月 | 日本語ジャーナル 7月号 pp.38-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第254号、鴻儒堂出版社 | |
| アフターファイブ | 単 | 2008年6月 | 日本語ジャーナル 6月号 pp.38-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第253号、鴻儒堂出版社 | |
| 電話対応・受付・応接室で一応用編一 | 単 | 2008年5月 | 日本語ジャーナル 5月号 pp.38-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第252号、鴻儒堂出版社 | |
| ビジネスにおける日本式名刺交 | 単 | 2008年4月 | 日本語ジャーナル 4月号 pp.38-41 | 『階梯日本語雑誌』通巻第251号、鴻儒堂出版社 | |
| ビジネスにおける受付の仕方 | 単 | 2008年3月 | 日本語ジャーナル 3月号 pp.86-89 | 『階梯日本語雑誌』通巻第250号、鴻儒堂出版社 | |
| ビジネスにおける電話のマナー | 単 | 2008年2月 | 日本語ジャーナル 2月号 pp.86-89 | 『階梯日本語雑誌』通巻第249号、鴻儒堂出版社 | |
| 初級中国語の導入方法と教室活動 | 単 | 2006年6月 | 高等学校中国語教育全国大会 pp.37 | 初級会話の効果的な定着と興味関心を高めるための、コミュニケーションアプローチに基づく教室活動の実践例を示した。 | |
| 研究業績(過去3カ年分) | | | | | |
| 著作数 | 論文数 | 学会等発表数 | その他 | 国際的活動の有無 | 社会的活動の有無 |
| 0 | 0 | 2 | 1 | 有 | 有 |
| 学 内 運 営 業 績 | | | | | |
| 1 役職, 各種委員会等 (主要 10 件程度) | 2004年4月~2006年3月 | 入試広報委員会・委員 | | | |
| | 2007年4月~2008年3月 | 教務委員会・委員 | | | |
| | 2005年4月~2007年3月 | 教務委員会・委員 | | | |
| | 2006年4月~2016年3月 | 学生委員会・委員 | | | |
| | 2010年4月~2016年3月 | 地域国際交流委員会・委員 | | | |
| | 2016年4月~現在に至る | 学生・地域国際交流委員会・委員 | | | |
| | 2016年4月~現在に至る | 自己点検・評価委員会・作業部会・委員 | | | |
| 学 外 活 動 業 績 | | | | | |
| 1 本学以外の機関(公的機関・民間団体等)を通しての活動 (主要 10 件程度) | 2005年7月 | 総合演習特別講義(市立名寄短期大学児童専攻) | | | |
| | 2006年10月 | 総合的な学習時間の指導(市立多度志中学校) | | | |
| | 2007年5月, 2011年11月 | 警察通訳(北海道旭川方面深川警察署) | | | |
| | 2008年3月 | 総合的な学習における特別講義(深川東高等学校) | | | |
| | 2009年9月 | 台湾八八水害とその義捐活動に関する報告(深川東高等学校) | | | |
| | 2010年9月 | 広報関係文書翻訳(深川市環境課) | | | |
| | 2011年2月 | 高校生・保護者対象教育講演(公文旭川事務局・深川東教室) | | | |
| | 2011年12月 | 小中高校生対象教育講演(公文旭川事務局・北光教室) | | | |
| | 2014年3月~2014年12月 | 子どもの読書活動推進計画策定委員会・委員長(深川市生涯学習課) | | | |
| | 2015年1月 | 小中高生保護者対象教育講演(公文旭川事務局・サニータウン教室) | | | |
| | 2015年7月 | 台湾華語スピーチコンテスト(台北駐日経済文化代表処札幌分処) | | | |
| 2 学会・学術団体等の活動 (主要 10 件程度) | 2000年4月~現在に至る | 日本音声学会・正会員 | | | |
| | 2002年6月~現在に至る | 中華民国斐陶斐荣誉学会・荣誉会員 | | | |
| | 2004年4月~2005年3月 | 深川国際交流協会・会員 | | | |
| | 2005年3月~現在に至る | 日本語教育学会・正会員 | | | |
| | 2009年10月~現在に至る | 中検フォーラム・正会員 | | | |
| | 2013年4月~現在に至る | 旭川日台親善協会・正会員 | | | |